

# “Authentic Materials”として英語の歌を 活用した大学での授業実践： 情意フィルター仮説と学習動機の観点から

今 村 梨 沙

## Abstract

The purpose of this study is to find out the possibilities of motivating university students in a compulsory English class using a textbook which includes English songs as well as English sound changes. Also it is to clarify whether they could understand and explain sound changes in English songs: linking, assimilation and elision.

Songs are supposed to be useful to weaken the affective filter which prevents second language acquisition. They also have authenticity and prosodic features which are utilized in colloquial English. From this point, English songs deserve to be used in English class.

Research questions of this study were: (1) Is it meaningful for students to learn English using English songs such as Western music in class? (2) Can they understand and explain sound changes which appear in English songs?

The participants were 23 non-English-major second-year university students. They were mainly expected to improve their listening and speaking abilities in this course. They learned authentic English through English songs and gave presentations picking out English songs they were interested in at the end of semester.

As a result, the questionnaire showed that the students felt English songs were a meaningful and fun way to learn English. They could also mention the sound changes in their presentations although three students could not explain the names of those correctly. This study implied that English songs had possibilities to encourage students study English.

## 1. はじめに

英語学習者にとって、洋楽は授業外で意識的または無意識的にも触れる最も身近な英語媒体であるが、教育現場では重要視されているとは言えない(小林、2006)。成る程、洋楽が英語の授業の雰囲気作りのために用いられることはしばしばあっても、4年制大学の1回90分通年30回の英語の授業の柱になるという可能性は高くはないだろう。

Schoepp (2001) は、洋楽をはじめとする英語で書かれた歌を授業で使用することで、学習者の情意フィルター (the affective filter) を下げて、学習に対する不安を軽減させて英語学習を促す役割があると主張している。情意フィルター (the affective filter) とは、Dulay and Burt (1977) が最初に提唱したものであり、言語習得のためのインプットを妨げる心理的障壁を指している。Krashen (1982) は、英語学習者の情意フィルターが低い場合、効果的な学習が可能となるという情意フィルター仮説 (the affective filter hypothesis) を提唱した。Schoepp (2001) によると、情意フィルター仮説は、授業担当教員が学生にとって学習に取り組みやすい雰囲気や環境を提供することで成立するものであり、歌がその一助となりうる可能性がある。また、Schoepp (2001) は Saricoban and Metin (2000) に言及し、彼らは英語の歌を用いて英語を聞く・話す・読む・書く、いわゆる英語の4技能を養うことができることを示している。つまり、英語の歌が情意フィルター (the affective filter) を下げ、学習者に英語学習を促進する一つの方法となることができるのである。

加えて、Saricoban and Metin (2000) は、英語の歌が “authentic materials” を提供し、学習動機を高めると主張している。英語の歌は、強勢 (stress)・リズム (rhythm)・抑揚 (intonation) といった韻律的特徴 (prosodic features) を学習できるという観点から有効な英語学習教材だと

考えることができるのである (Saricoban & Metin, 2000)。韻律的特徴 (prosodic features) を習得するために、強勢 (stress)・リズム (rhythm)・抑揚 (intonation) を英語の授業で教えることは重要である。しかし、それらに留まらず、音の連結 (linking)・同化 (assimilation)・脱落 (elision)<sup>1</sup>も授業で扱われる必要がある。教材に掲載されている個々の英単語は、極端なほどに正確に発音されていることがあるため、学習者が教科書の英語と日常で使用される英語の間の「乖離」に直面する可能性があるからである (小林, 2006)。

本研究の目的は、洋楽をはじめとする英語の歌を掲載した教科書を用いた授業を行うことは、学生の英語学習の動機づけとなりうるのか、また学生が授業で学習した英語の音声変化を正しく理解できるのかを検証することである。

## 2. 先行研究

### 2.1 教材としての英語の歌の有効性

小林 (2006) は、洋楽が “authentic materials” として有効な可能性を保持していることを主張している。前項で言及した通り、英語学習者は、授業で扱われてきた教材の英語と教室外で実際に使用される英語の違いに直面した時に、困難さや戸惑いを強いられる場合がある。こうした英語の乖離を防ぐために、“authentic materials” を扱う必要がある。小林 (2006) は、“authentic materials” が英語母語話者向けで、教育を目的とせず、自然な言語体である必要があるとし、Richards (1987) のリスニング教材における “authenticity” の基準<sup>2</sup>を引用して、“relative authenticity” であることの重要性を指摘している。つまり、完全に即興性を持つものだけでなく、創作された談話 (discourse) である映画やテレビ番組、洋楽も “authentic materials” として認められるということである。

Richards (2002) は、自身の30年の研究生生活を振り返り、“Authenticity in materials became a catchword...” (p. 15) と綴り、近年リスニング教材は“based on authentic speech”であり、また“authentic speech”の特徴を捉えているものであると述べている。洋楽には、口語的な表現が多く見られる<sup>3</sup>ことから、それらが英語母語話者から生み出されたものに関しては“authentic”なもの、また非英語母語話者により作成されたものは“based on authentic speech”と解釈することができる。

角山 (2001) も英語の歌が“authentic”であるという観点から、洋楽が授業の雰囲気作りやゲーム、英語学習の動機づけを高める効果のほかに、通常の英語教材と同様に教科書としての有用性を持っていることを主張している。角山は、洋楽を“authentic materials”として授業で生かすため、歌詞を掲載するだけでなく、英語の音声変化（音の連結、脱落、同化、弱化など）を歌詞から取り上げて解説する項目を設けた教科書を開発している。今回の筆者の授業において使用した教科書は、角山が考案したものである。教科書の構成は3.2で述べる。

また、飛渡 (2002) は、英語の歌を利用した大学生用の教科書の目的はリーディング向けとする傾向にあったが、現在ではリスニングもしくは4技能を育成するものとする教材が増えてきていることを示唆し、その可能性に期待を寄せている。

このように“authenticity”を備えているという観点から、英語の歌は授業で扱う教材として有効性を保持していると考えられる。

## 2.2 英語の歌を用いた授業実践例

筆者は、保育士養成課程の学生を対象に、子ども向けの英語の歌を扱った授業実践を行い、英語の歌が学生にとって英語学習の動機づけとなりうることを明らかにしてきた (今村、2015)。船田・執行・カレイラ (2019) は、この報告を評価し、「子どもの英語の歌を紹介・発表する活動」を保育士養

成課程の授業で実践し、学生がこうした活動を肯定的に感じ、英語への学習意欲を感じたことを報告している。この2つの授業実践報告は、被験者が保育士養成課程の学生であるが、英語の歌を歌うことや触れることに関して好意的に捉え、英語の授業に取り組む動機づけとなったといえるだろう。

階戸（2014）は、通年の授業で洋楽を使用したディクテーションとプレゼンテーションを実施した。その結果、学生に「洋楽への関心」と「英語への気付き」だけでなく、「ディクテーションへの気付き」と「プレゼンテーションへの関心」も生まれたことから、洋楽、ディクテーション、プレゼンテーションを包含した授業は、効果的な英語学習を促す可能性があることを示した。

森（2016）は、洋画と洋楽を用いて授業を行い、質問紙調査の結果から、学生が興味深く授業に取り組み、英語学習に対する意欲を高めたと報告している。また、学習意欲の増進がリスニング力を強化し、発音、語彙や英語表現の習得を促していることを明らかにした。

Laskowski（1995）は、英語の歌が学生にとって親しみを持つことのできる学習ツールであり、授業内で使用することで英語学習の動機づけに大きな効果が見られた、と報告している。

以上のことから、“authentic materials”と考えられる英語の歌を用いて授業を行うことは、学生の英語学習意欲を増進させ、効果的な授業実践の可能性が存在するといえる。

### 3.1 調査の目的

洋楽をはじめとする英語の歌は、学習者の情意フィルター（the affective filter）を下げ、学習動機を高める。また、“authentic materials”という観点から、英語の音声変化を理解し、授業で学習した英語と実生活で使用する英語の間に生じる「乖離」を避けることができる。

そのため本研究の目的は、洋楽をはじめとする英語の歌が掲載された教科

書を用いた授業が学生の英語学習の動機づけとなりうるのか、また学生が英語の音声変化を正しく理解できるか検証することである。

本研究の具体的な Research Question (RQ) として、以下の2項目を設定した。

RQ1：学生は、洋楽をはじめとする英語の歌を媒介として英語を学習することとを有意義だと感じるだろうか。

RQ2：学生は洋楽をはじめとする英語の歌の歌詞の中に出てくる音声変化を正しく理解し、再現して説明することができるだろうか。

RQ2で研究対象とする音声変化は、教科書および授業で複数回取り上げた音の連結 (linking)、脱落 (elision)、同化 (assimilation) の3種のみを対象とする。

### 3.2 調査協力者および授業内容

調査協力者は、私立大学に通う非英語専攻の2年生23名 (男女比 18 : 5) である。授業はリスニング・スピーキングに重点を置いた通年 (全30回) の英語必修科目であり、対象者のクラスは、習熟度別クラス編成の下位クラスに属していた。

使用する教科書は、『English with Pop Hits ヒットソングで学ぶ総合英語』 (角山・Capper, 2014) で、14曲の洋楽が掲載されていて、単語や重要表現の問題、歌詞の空欄補充、楽曲に出てくる音声変化の解説、楽曲やアーティストに関する読解問題、楽曲に用いられている文法の解説と演習問題から構成されていた。

毎回の授業では、この教科書を用いて授業を行い、教科書に掲載されている楽曲を聞いて空欄補充、歌詞の内容理解、音声変化の理解と発音、ペア・グループで歌についての英語での意見交換を行った。到達度確認のため、通年の最後の授業では、学生の個人発表を行った。人数の都合上、発表は29回目と30回目に実施した。

### 3.3 学生の個人発表の内容

学生の個人発表では、各自が扱いやすい英語の歌を1曲選択し、英語と日本語を用いて楽曲について説明するというものである。選択する楽曲は、教科書で既に学習した楽曲を除いて、英語で歌詞が書かれていれば、歌手手が英語母語話者・非英語母語話者かは問わず、リリースされた年や場所、曲の長さなどそのほかの制限を設けなかった。英語で発表する項目は、楽曲のタイトル・歌手名・選曲した理由とした。日本語で発表する項目は、楽曲の中で発生する音声変化・文法の説明・歌詞の魅力または個人的に注目してほしいところとした。音声変化については、音の連結（linking）、脱落（elision）、同化（assimilation）の3種のみに限定し、1箇所以上説明して再現することとした。説明の手順は、音声変化が生じている場所を指摘し、実際に学生が読み取った音声変化通りに再現し、それが3種の音声変化のどれであるか名称を述べることとした。文法については、教科書に掲載されていたものも含めて、学生がこれまでに学習してきたそのほかの英文法を対象とした。発表時間は、楽曲の一部再生も含めて一人3分以上5分未満とした。授業内課題として、各学生が発表者全員の発表の感想を書くこととした。また、学生は自分の発表が終了したら、振り返りとして自分の発表の感想を書くこととした。

### 3.4 調査方法と調査内容

全30回の30回目の授業で、受講者全員を対象に多肢選択形式と記述式で質問紙調査を行った。質問項目1「授業で英語の歌を通して英語を学習したことは、有意義だと感じましたか」について、「5. 強くそう思う」、「4. そう思う」、「3. どちらともいえない」、「2. そう思わない」、「1. 全くそう思わない」の5件法で受講者に回答させた。質問項目2「質問1で選んだ解答の理由を教えてください」は自由記述で書かせた<sup>4</sup>。英語の音声変化に関しては、29回目と30回目の授業で実施した個人発表の中で、各学生に3種類の中

196 “Authentic Materials”として英語の歌を活用した大学での授業実践：情意フィルター仮説と学習動機の観点から  
からいずれかの音声変化を一つ選んで取り上げて説明させた。

### 3.5 分析方法

質問紙の項目1に関しては、5つの回答の全体に対する割合を算出した。項目2については、コメントキーワード別（「よかった」「楽しかった」「興味を持つことができた」の3種）に分類した。音声変化に関しては、個人発表で各学生が3種類（連結・脱落・同化）の中で、どの音声変化を取り上げたか、また正しく説明し、再現することができたのか教員が分析した。

## 4. 調査結果

### 4.1 質問紙調査の結果

質問項目1「授業で英語の歌を通して英語を学習したことは、有意義だと感じましたか」の結果は、「5. 強くそう思う」44.4%、「4. そう思う」50%、「3. どちらともいえない」5.8%、「2. そう思わない」0%、「1. 全くそう思わない」0%であった（図1）。

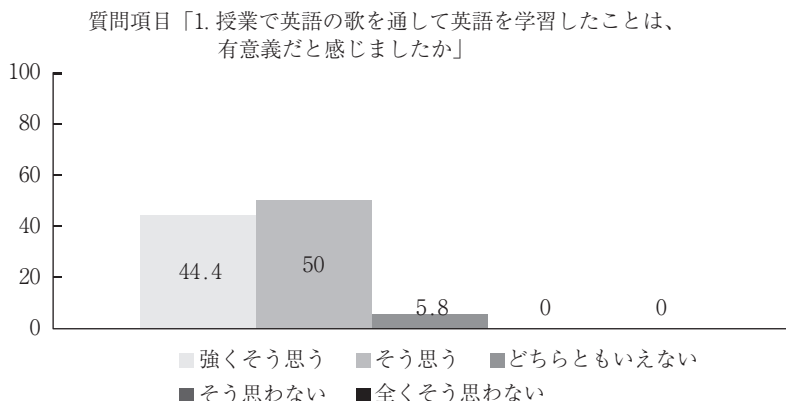


図1. 質問項目1の結果



質問項目2「質問1でその回答を選んだ理由を教えてください」に関しては、20名が回答、3名は無記入であった。20名のコメント内容を3つのキーワード「よかった」「楽しかった」「興味を持つことができた」に分類してまとめた。

〈コメント〉

「よかった」…11名

- 色々な曲が聞けてよかった（5名）
- 洋楽が好きなのでたくさんの色々な曲を通して勉強ができてよかった（2名）
- みんなの発表がよかった（1名）
- 発表でのみんなの解説がわかりやすくてよかった（1名）
- 新たな曲をたくさん知ることができてよかった（1名）
- 英語の曲をたくさん知ることができてよかった（1名）

「楽しかった」…6名

- 様々な曲が聞けたので楽しい授業だった（2名）
- あまり色々な曲に触れる機会はないと思うので、楽しく授業を受けることができた（1名）
- 最近の歌から昔の歌まで様々な曲が聞けて楽しかった（1名）
- みんなの発表で曲紹介を聞くのがとても楽しかった。知っている曲でも意味を知らなかったのを知ることができてとても楽しかった（1名）
- 全く飽きずに発表を楽しむことができた（1名）

「興味を持つことができた」…3名

- 曲を知ることができただけでなく、その曲のこういった部分に注目し、気をつけて聞く場所はどこかという説明があって、より聞きやすく興味を持

つことができた（1名）

- 知らない曲がたくさんあったので、興味を持ったのでこれから聞いてみたい（1名）
- いつも聞かない曲もあって、もっと洋楽に興味を持った（1名）

#### 4.2 英語音声変化を発音して説明することの結果

結果を表1に示した。今回、音声変化の3種類（連結・同化・脱落）の内、最低1箇所と言及することを求めたが、2箇所以上言及した学生は表の中に説明した音声変化の名称と語をすべて書いた。音声変化の名称の前に「×」と書いたものは、名称と現象が一致していないことを表している。3名は、音声変化を正しく発音できたが、名称を正しく説明することができなかった。

表1. 学生が個人発表で扱った楽曲、歌手と言及した音声変化の名称と語

Titles	Artists	学生が言及した音声変化の名称と語
<i>All My Loving</i>	The Beatles	× 連結 (kiss you)
<i>A Whole New World</i>	Brad Kane and Lea Salonga	脱落 (new world)
<i>Chandelier</i>	Sia	連結 (like it) / 連結 (till I)
<i>Closer</i>	The Chainsmokers	同化 (met you)
<i>Cut To The Feeling</i>	Carly Rae Jepsen	脱落 (cut to)
<i>Happily</i>	One Direction	脱落 (had to)
<i>Happy</i>	Pharrell Williams	連結 (clap along)
<i>Here's to Never Growing Up</i>	Avril Lavigne	連結 (gotten us)
<i>Honesty</i>	Billy Joel	連結 (find a)
<i>Iridescent</i>	Linkin Park	連結 (let it go)
<i>Last Love</i>	Rihwa	脱落 (let me) / 連結 (as a) / 連結 (All I)

<i>Lego House</i>	Ed Sheeran	同化 (out of)
<i>My Heart Will Go On</i>	Celine Dion	×連結 (hold you)
<i>On Our Way</i>	The Royal Concept	×連結 (won't you)
<i>Pay Phone</i>	Maroon 5	同化 (That's your)
<i>Perfect</i>	Ed Sheeran	連結 (fell in)
<i>Shape of You</i> (3名が選曲)	Ed Sheeran	連結 (find a) / 脱落 (isn't the) / 脱落 (smell like)
<i>Style</i>	Taylor Swift	同化 (out of)
<i>Take It Easy</i>	The Eagles	連結 (take it easy)
<i>Treat You Better</i>	Shawn Mendes	連結 (deserves a)
<i>You belong with me</i>	Taylor Swift	連結 (captain a)

個人発表で受講者全員が、音の連結 (linking)、脱落 (elision)、同化 (assimilation) の3種のいずれかに言及することができた。また、聞こえた通りに音を再現することもできた。学生が言及した音声変化を人数順で示すと、連結 (13名)、脱落 (6名)、同化 (4名) であった。しかし、23名中3名は音声変化が発生している場所を指摘できたものの、その名称を誤って説明した。学生が誤って説明を行った音声変化と他に説明することができた音声変化を表2に示した。

表2. 学生が誤って説明した音声変化

指摘した英語表現	誤った音声変化の名称	正しい音声変化の名称	ほかに説明した音声変化の名称
hold you	脱落	同化	×連結 (We'll stay)
won't you	連結	同化	連結 (hands and) / (when I) / (that I)
kiss you	連結	同化	なし

以下、“hold you”を脱落と説明した学生を「学生A」、「won't you」を連結

と説明した学生を「学生B」、「kiss you」を連結と説明した学生を「学生C」とする。学生Aは、*MY HEART WILL GO ON*の歌詞から2箇所取り上げた。まず、“hold you”を再現することはできたが、名称を間違えた。さらに、歌詞の中の“We’ll stay”が連結していると説明した。実際には“We’ll”の部分がやや長く歌われていただけで、音声変化と考えられる現象は生じていなかった。再現の際も本人は連結しているようにできなかった。短縮形を音の現象と捉えた学生はほかにもいた。その学生は、Avril Lavigneの*Here’s to Never Growing Up*を取り上げ、歌詞の中の“gotten us”を連結と説明することができたが、“we’re”に脱落が生じていると説明した。再現の際は、脱落していなかった。学生Bは、The Royal Conceptの*On Our Way*を取り上げて、合計4箇所すべて再現することはできたが、すべて連結と説明し、1箇所違えた。学生Cは、“kiss you”の一つだけを取り上げ、自ら再現することはできた。誤って説明したもの以外の音声変化への言及はなかった。

## 5. 考 察

### 5.1 RQ1に関する考察

第1の研究課題は、「学生は、洋楽をはじめとする英語の歌を媒介として英語を学習することを有意義だと感じるのだろうか」であった。まず、質問項目1で肯定的な回答である「5. 強くそう思う」と「4. そう思う」を合わせて全体の94.4%であったので、ほとんどの学生が英語の歌を通して英語学習をしたことを有意義だと感じていたことが明らかになった。「3. どちらともいえない」を選択した残りの学生が5.8%存在するが、質問項目2で好意的なコメントしかなかったことは気がかりな点である。英語の歌を用いた授業が有意義であったか否か、ということに対して判断を迷ったということは、言語化できない何らかの疑問や意見を抱いていたのかもしれない。

次に、質問項目2の理由では、20名の学生が洋楽をはじめとする英語の歌を通して英語を学習することを楽しみ、関心を持って取り組むことができた趣旨のコメントを書いたため、学生にとって身近な英語の歌は英語学習の動機づけとなる可能性が示唆された。特に、学生の個人発表も含めて、楽曲の種類の多さを授業の有意義であった点として挙げている学生が19名であったことから、教科書に掲載されている歌だけでなく、学生自身が選曲することも重要だといえるだろう。また、学生が選曲した理由のほとんどが“*This is my favorite song.*”や“*I like this song / artist.*”など選んだ歌、または歌手が好きであるからという理由であった。学生自身が扱いやすい、または好きな英語の歌を用いることで、情意フィルター（the affective filter）を下げ、英語学習に関心を持って取り組むことができる可能性を見出すことができた。

## 5.2 RQ2に関する考察

第2の研究課題は、「洋楽をはじめとする英語の歌の歌詞の中に出てくる音声変化を正しく理解し、再現して説明することができるのだろうか」であった。受講生23名中20名が、歌詞の中で音声変化が生じている場所を指摘して、音の連結（linking）・脱落（elision）・同化（assimilation）のいずれかであるということを正しく説明することができた。そして、受講者全員が指摘した音声変化を再現することができた。しかし、今回は文章を音読しての再現ではなく、音の現象が生じている2語から3語程度の歌詞の1箇所のみでの再現だったので、できたのかもしれない。もし音声変化が発生している歌の一節を音読させると、再現できない可能性がある。

最も多く言及された音声変化が連結（linking）であることから、今回の受講者にとってわかりやすい音声変化が3つの中では連結（linking）であったと考えられる。一方で、同化（assimilation）は、言及した人数が最も少なく、音声変化の名称を間違えた3名が説明しようとした音声変化でもあった。このことから、受講者にとって同化（assimilation）が最も理解し

づらかった可能性が示唆された。音の連結（linking）と同化（assimilation）の違いも含めて、教員のさらなる詳細かつ丁寧な音声変化の説明が必要だと考えられる。個人発表で、音の連結（linking）か脱落（elision）に言及した学生の中には、同化（assimilation）が十分に理解できていなかったという理由で、発表での言及を避けた可能性も否定できない。従って、すべての学生が英語の音声変化を完全に理解できたとは言い難い。しかしながら、すべての学生が音声変化の発生している場所を正しく指摘できたことは、英語の歌が音声変化の理解を促したと捉えることができるだろう。

## 6. ま と め

本研究の結果、洋楽をはじめとする英語の歌を掲載した教科書を用いた授業を行うことは、学生の英語学習の動機づけとなる可能性が示唆された。また、教科書のみでなく、各学生が選曲した英語の歌を用いた発表を取り入れることで、学生はより楽しく興味を持って英語学習に取り組むことができる可能性も見出すことができた。洋楽をはじめとする英語の歌が学習者の情意フィルター（the affective filter）を下げる効果を保持している可能性は示唆されたが、今回は質問紙の質問項目が少なかったことと、23名の学生のみが対象であったことから、今後のさらなる実践と考察が必要である。

また、授業で学習した音声変化に関しては、名称を間違える学生はいたものの、音声変化が生じている場所を指摘することができた。さらに、今回は音の現象が生じていた場所だけであれば、再現することもできた。音の現象の再現に関しては、発生している場所は再現できたが、文章になっても再現できるのかを追及する必要がある。

こうした英語の歌が学習教材としての可能性を秘めている観点から、英語学習者には洋楽をはじめとする英語の歌に日常的に触れること、そして授業内においては英語の歌が掲載された教科書を使用しなくとも、英語の歌をも

う少し重要視することが望ましい。今後、学生が英語の歌を“authentic materials”として、音声変化を習得し、それらを日常会話で生かすことができるように、指導者として効果的な授業を設計していきたい。

#### 注

1. 音の連結 (linking) とは、単語と単語が繋がって1つの単語のように発音される現象で、子音で終わる単語の後に母音で始まる単語が続いた場合によく起こる。同化 (assimilation) は、2つの音が混ざって別の1つの音になる現象、脱落 (elision) は、前の語の最後の子音が抜けて発音される現象を指す。(角山・Capper, 2015)

2. Richards (1987) は以下のように述べている。

While much authentic discourse may be too disfluent or difficult to understand without contextual support, materials should aim for relative authenticity if they are to prepare listeners for real listening. (p. 172)

3. 小林 (2006) は、俗語や卑語など不適切な表現が含まれていない曲を授業で取り扱いたいとしながらも、“He ain’t…” や “I ain’t gonna” など頻出するものに関しては、大学生の場合、英語の基本を学んで入学するため、授業担当者が事情を明確に説明することで問題は起こらないと考えている。

4. 今村 (2015) では、質問紙の質問項目は5項目から成っていた。今回2項目と少ない理由は、学生の発表後に質問紙調査を行ったが、予想以上に学生発表の時間が長くなり、質問紙調査の回答時間に十分な時間を確保できず質問項目を大幅に削減したことと、質問紙調査に加えて、学生の英語音声変化に対する理解度を Research Question として考察するため分量を抑えたためである。本来であれば、質問項目に「この授業を受けてから洋楽や英語の歌を聞く機会は増えましたか」「英語の授業を歌の教科書で行いましたが、意義のあるものだと感じましたか」「一般的ナリスニング・スピーキングの教科書とこの授業で使用した歌を題材にした教科書のどちらで英語を学びたいと思いますか」という質問を行う予定であった。

本稿は、2018年8月26日に第44回全国英語教育学会京都研究大会で「ポップスを使用した英語音声変化の学習成果の報告」としてポスター発表した内容に、分析を加えて再構成したものである。

## 引用文献

- 今村梨沙 (2015). 「保育士養成課程における ESP の有効性の考察—学習者の動機づけの観点から—」. 『同志社女子大学英語英文学会 (Asphodel)』 50, 192-204.
- 角山照彦 (2001). 「英語教育における音楽教材の活用—音楽と異文化トピックスを組み合わせた総合教材『ポップスで学ぶ総合英語』の開発—」. 『広島文教女子大学紀要』 36, 9-20.
- 角山照彦・Capper, S. (2015). 『ヒットソングで学ぶ総合英語』 東京：成美堂
- 小林敏彦 (2006). 「オーセンティックな英語リスニング教材開発の理論と実践—データ収集からハンドアウトの作成と教授法まで—」. 『小樽商科大学人文研究』 112, 27-110.
- 階戸陽太 (2014). 「洋楽を用いたディクテーションとプレゼンテーションを組み合わせたリスニングの実践—共同学習を取り入れた授業の中で—」. 『中部地区英語教育学会紀要』 43, 213-220.
- 飛渡洋 (2002). 「歌を利用した大学生用英語テキストについて」. 『日獣畜大研報』 51, 55-59.
- 松田まなみ・執行智子・カレイラ松崎順子 (2019). 「保育士養成課程における学生の自主的な学びに関する実践報告：子どもの英語の歌を用いた活動」. 『東京未来大学研究紀要』 13, 129-139.
- 森貞 (2016). 「洋画・洋楽を用いた英語教育」. 『福井工業高等専門学校研究紀要 自然工学』 49, 253-259.
- Dulay, H., & Burt, M. (1977). Remarks on creativity in language acquisition. In M. Burt, H. Dulay, & M. Finocchiaro (Eds.) *Viewpoints on English as a second language*. 95-126. New York: Regents.
- Good, A. J, Russo, F. A & Sullivan J. (2015). The efficacy of singing in foreign-language learning. *Psychology of music* 43. 627-640. California: SAGE Publications.
- Krashen, S. D. (1982). *Principles and practices in second language acquisition*. 30-32. Oxford: Pergamon Press.
- Laskowski, T. (1995). Using songs in the classroom: Enhancing their educational value. *Annual Review of English Language Education (ARELE)*, 6, 53-61.
- Richards, J. C. (1987). Listening comprehension: approach, design, procedure. In M. Long & J. Richards (Eds.), *Methodology in TESOL: A book of readings*, 161-76. New York: Newbury House.



Richards, J. C. (2002). 30 Years TEFL / TESL: A personal reflection. *RELC Journal* 33, 1-36. Singapore: SEAMEO Regional Language Centre.

Saricoban, A. & Metin, E. (2000). Songs, verse and games for teaching grammar. *The Internet TESL Journal* 6, 1-6.

<http://iteslj.org/Techniques/Saricoban-Songs.html>

Schoepp, K. (2001). Reasons for using songs in the ESL / EFL Classroom. *The Internet TESL Journal* 7, 1-4.

<http://iteslj.org/Articles/Schoepp-Songs.html>